

園だより 春休み

主は、あなたたちのたどる旅路を見守っておられる。

土師記 18 章 6 節

日中、やっと春らしい暖かさを感じられた日もあった今年度幼稚園生活最後の短い3月の日々。子どもたちも時を惜しむかのように一日一日それぞれの思いを存分に発揮し過ごしていました。コロナ禍に対応しながら過ごす毎日が当たり前の日々であった今年度の一年間、子どもたちの生きる力の豊かさ、逞しさに今さらながら喜びと感動を感じずにはられません。

そんな心地よいとある1日。年長児のドッジボール大会が催されました。クラスごとに作戦会議を重ね挑んだクラス対抗ドッジボール大会。子どもたちの意欲に溢れ仲間の力を感じながらのゲーム展開に応援にも力が入りました。様々なドラマを展開しながらのゲームが終了したとき、一人の男児に数人の女児がものを申ししていました。男児が発した心無い言葉に納得がいかなかった様です。それぞれに男児に想いをぶつけていました。男児も状況は理解している様でしたが、むっとした表情をしていました。悲しい気持ちになったことなど正論を立て続けに伝える女児たち。その気持ちも理解はできました。ただ男児には反論の余地も言葉を挿む余地もありません。「何か言ってよ!」との言葉が聞こえたので、私は「A君の話も聞いてあげたら」とだけ伝えました。女児たちは黙りました。でも、A君から言葉は発せられませんでした。(弁解の余地無しの心持ちだったのでしょうか)待ちきれず女児たちはまた伝え始めました。女児の一人Bちゃんが「ごめんねって言えばいいだけだよ」と言いました。その言葉に私が「ん!?!」と思いました。常々、心のこもらない「ごめんね」は意味がないと思っていたからです。私はBちゃん言葉にどの様に対応しようかと思いつらしながら注意深く見守りました。そして、Bちゃんの表情やA君に注ぐ眼差しにドキッとしました。Bちゃんは不機嫌なA君の全てを包み込むかのように見つめていたのです。既にA君を許している心が手に取るように感じられました。「ごめんねって言えば〜」の言葉はきっとこの心ざわつくときを終わりにするきっかけのためだったのでしょうか。少しすると聞こえないくらいの声でA君は「ごめん」と言ったようです。その声はBちゃんにだけ聞こえました。勿論私には聞こえませんでしたし、一緒の女児たちも思いを伝え続けていたため聞き取ることは出来なかったようです。Bちゃんからの「ごめんねって言ったよ」の言葉で話し合いは終了しました。年長児たちの心の成長に感動しかありませんでした。そして子どもたちから発せられる言葉の奥にどれほど多様な思いが込められているか、保育者として子どもたちと向き合うときの心の在り方に対して深く考えるときを貰いました。

今年度も保護者の皆様のご支援により、この様に子どもたちの豊かな成長を確信できた一年となりましたこと、心よりお礼を申し上げます。まだまだその時々での対応が求められる来年度であると思います。変わらないお支援をよろしくお願い申し上げます。

園長 駿河 幸子